



女神なんて お断りですっ。5

紫南
Shinan



レジーナ文庫

登場人物紹介



目次

女神なんてお断りですっ。

5

書き下ろし番外編

女神と平和を守る者達

女神なんてお断りですっ。

5

第一章 女神の新たな門出

夜の闇の中。二人の少年は、急ぎ学園の寮へ向かっていた。

明日から新学期が始まる。今日は高学部への進学を祝い、気心の知れた友人達と集まつていたのだ。休暇中なので門限はないが、つい時間が経つのも忘れて遅くなつてしまつた。「そろそろ迎えに来ようとしているだろうな」

「ああ」

寮に残してきた従者達が心配しているだろう。ここは一刻も早く帰らなくてはと、片方の少年が前方を指差す。

「あのパン屋の横の道が近道のはずだ」

「少し暗いな。けど、今は時間との勝負だからな。これ以上遅くなると、父上に報告が行きかねない」

「ああ。走れば大丈夫だろう」

そうして彼らは、大通りから外れた路地へ入り込んだ。その道を通ればショートカットでき、時間は大幅に短縮される。

しかし、少年達は気付いていなかつた。彼らをつけている者達の存在に。

この街には多数の学園があるので、貴族の子息子女が多い。しかし、護衛もなく夜に出歩く者はまれだ。つまり少年達は、金に困った者達には格好の獲物だった。

三人の怪しげな男達が背後に迫る。そのうちの二人が、それぞれ少年達の肩を無遠慮に叩いた。

「わっ！」

「だつ、誰だ!?」

少年達は驚いて立ち止まる。振り返れば、ニヤニヤ笑う男達と目が合つた。

その卑しい笑みを見て、少年達は顔を強張らせる。肩に置かれた手を振り払う事もできないほど、足がすくんでしまつていた。

「兄ちゃん達い。こんな時間に危ねえなあ」

「不用心だぞ！」

「よしつ、おっちゃん達が寮まで送つてやるよ」

ただの親切な人ではないと、世間知らずな少年達でも分かる。

「い、いえ……っ」

「結構です……」

緊張と恐怖で渴いていく喉から、なんとか声を絞り出す。しかし、男達にはそんな少年達の言葉など関係ない。

「あつはつはつ、そんな緊張すんなって。大丈夫。おっちゃん達についてくればいいんだ」

男達は互いに一度目を合わせると、肩に手を置いていた一人が、少年達を強引に捕まえる。

「あつ、や、やめっ」

「た、助けてっ!!」

勝ち誇ったような笑みを浮かべる男達。騒がれては面倒だと思ったのだろう。手の空いている男が少年達の腹を一発ずつ殴つた。

「うつ」

「ぐつ」

氣絶して崩れる少年達を抱えようと、男達が腕に力を入れる。

その時だった。

コツン、コツンと足音が響いてきて、男達は反射的に振り返る。すると次の瞬間、何者かが一気に距離を詰めてきた。

それは人ではあり得ない速度で、男達にはその姿を視認する余裕もなかつた。

これでもかというほど目を見開く男達。そのうちの一人が倒れ、そちらに目を向けようとしたもう一人も倒れる。

残された一人が、咄嗟に頭をよぎつた言葉を口にした。

「銀のガーディアンっ……っ」

そして、最後の一人が地面に沈む。

それを見下ろす冷徹な瞳と長い銀髪が、暗い路地に射し込む月の光を反射していた。

◆◆◆

「ティア。そろそろ起きる時間だよ」

「ううん……」

キングサインのベッドに寝ている少女。

緩くウエーブのかかった茶色の髪は、ここ三

少女の名前はティアラール・ヒュースリー。周りからはティアと呼ばれている。フリーデル王国の一領主である、ヒュースリー伯爵の娘だ。彼女が目を覚ませば、快活に輝く茶色の瞳が見えるだろう。

「ふふ、可愛い寝顔だけど、今日は入学式ではなかつたかい？早く起きないと遅れるよ。あ、でも、お姫様を天馬で学園へ送るというのも素敵かもしけないね」

【入学式……】

寝ぼけた頭の中で、黒い天馬に乗つて学園に降り立つ自分と、麗しい魔王様の姿が見えた。そして、騒然とする学園の風景……

【つうわああつ！】

ティアは慌てて飛び起き、現状を確認する。夢と現実の境目が曖昧でドキドキが止まらない。

広いベッドの上でキヨロキヨロと部屋を見回す。一国の王の寝室らしい上品な部屋だ。ここがどこだか理解したところで、甘く微笑む麗人と目が合つた。

【ふふ、おはよう。可愛いお姫様】

【あ……お、おはようカル姐……】

ティアがカル姐ねえと呼ぶのは、前世からの友人である魔族の王だ。名はカルツォーネ・レディイレース。本当は魔王としての長つたらしの名前もあるそうなのだが、それは教えられていない。

男も女も虜にしてしまう天然タラシ。そんなカルツォーネが世にも珍しい黒い天馬に乗つて現れれば、学園は大騒ぎになるだろう。

夢で良かったと胸を撫で下ろすティア。だが、カーテンの隙間から射し込む朝日に気付き、先ほどの夢が現実になりかねないと焦る。

【お、起きなきやつ。着替え着替えつ！】

【ここにあるよ。そんなに焦らなくても大丈夫。入学式は昼からなんだろう？】

【うん。そなんだけどね】

差し出された着替えは、真新しい制服だ。今年十歳になるティアは今日、国立フェルマーラ学園の小学部に入学する。

髪だけでなく身長も伸び、顔つきも少し大人びた。澄ました令嬢を装えば、誰もが振り向かずにはいられないだろう。

【先に寮の方へ、荷物の確認に行かなきやならないの。お兄様達が待つてははずだから】

「はあい」

ティアは今日までの三日間、この魔族の国で過ごした。七歳の時に再会してから、もうすぐ三年。カルツォーネに会いに、幾度となくこの国を訪れている。最初の頃は日帰りで保護者付きだったのだが、この一年でようやく一人での宿泊も許されたのだ。

着替えをしながら、ふと前世の事を思い出す。

バトラール王国の第四王女、サティア・ミュア・バトラール。それが前世での立場と名前だ。圧政を敷いた王家を自らの手で滅ぼし、十五歳で命を落とした。それはサティアにとつて苦悩の末の決断であり、善行をしたつもりはない。

しかし、サティアは民を救つた『隕罪の女神』と崇められ、この時代に女神として転生する事になつた。前世では諦めた冒険者になるという夢を叶え、今を楽しんでいる。神からは、また世界を平和に導いてほしいなどと言われているが、自分や周りの人々に関係がない以上、それを聞いてやるつもりはなかつた。

寝室の隣にある部屋へ移動し、朝食の席につく。テーブルには、バランス良く考えられたメニューが並んでいる。ティアは中央に置かれた籠からパンを取り、幸せそうに頬張つた。

「私も行きたいな」「え……」

カルツォーネの言葉に、思わず顔を引きつらせるティア。目の前に座るカルツォーネは、片肘を突いて紅茶を飲みながら微笑んでいた。

「だって、入学式なんて君がよりいつそう輝く瞬間じゃないか」

前世で友人だったカルツォーネは、再びティアに会えた事が嬉しくてたまらないらしい。再会から三年が経とうとしている今でも、必要以上に構つてくる。ティアも自分勝手なやり方で人生を終えて別れも告げなかつた事に引け目を感じており、邪険にできずに入った。

「そ、そんな顔してもダメだよっ!! そう言われると思つたから、ちゃんと制服姿を見せに来たんだじゃん」

たとえ魔王だと気付かれなくても、カルツォーネが目立つ事に変わりはない。保護者席などに座られて、知り合いだと思われたら大変だ。いや、それ以前に会場が騒然となり、式の進行に支障をきたすだろう。

「その制服、とても素敵だよ。良く似合つていて。けれど、それとこれとは別だろう。大人しくしていてもダメかい?」

「ダメ」

仕方ないなど、カルツォーネは肩をすくめる。その後、クスクスと笑いながら、そういうふうに尋ねた。

「シェリーは行くって言わなかつたのかい？ 朝の通信は随分あつさり終わつていたけど」

二人がシェリーと呼ぶのは、共通の友人であるシリス・ファイスマ。ハイエルフである彼は、まだ八歳だったサティアに求婚し、彼女が死した後はエルフの里の長を務めていた。

ある時、そこにある世界樹と呼ばれる大樹から、サティアが生まれ変わる事を知られる。里を飛び出した彼は、人族の国で冒險者ギルドのマスターとなり、五百年以上もの間サティアを待つっていたのだ。

その生まれ変わりであるティアへの執着は、日増しに強くなつていて。ティアが開発した通信具【伝話心具】を使い、一日三回の通信を欠かさず行うほどだ。

「行くつて言われたよ……。一ヶ月も前から押し問答して、最終的に『半日デート権』で黙らせた」

「半日？ そんな中途半端な感じで、よく落ち着いたね」

「そこは呑んでもらつたの。『一日デート権』にしたら、シェリーの事だもん。一分一秒まで無駄なく、きつかり丸一日拘束されるのが目に見えてるでしょ？」

「あー…………。なるだろうね……」

二人揃つて溜め息をついてしまうのは、それだけシリスを理解しているからだ。認識としては『困った友人』で一致していた。

「じゃあ、また来るね」

「ああ、気を付けて」

朝の喧騒が城下町から聞こえてくる頃、ティアは城の門の外にいた。傍にはマティという名の赤い狼がいる。最強の神獣とも言われる魔獸ディストレアの子どもだ。

「このローブ、ありがとう」

ティアが身につけているローブは、出がけにカルツォーネから贈られたもの。濃紺の生地で作られており、下の方には白い大輪の花が描かれている。

冒險者として活動する時は、邪魔にならないよう後ろで小さく結んでいる髪。それを今は、令嬢仕様のハーフアップにしていた。それがまた可愛らしいローブと制服に、とても良く似合っている。

「ふふ、それを着る度に、私を思い出してほしいな」

「うんうん。大丈夫。カル姐の事を忘れたりしないし」

「ああ、それと学園でいじめられたりしたら、ちゃんと言うんだよ」

「わ、分かった。……そつかあ。そういう事もあり得るんだもんね。気を付けないと……」

「そうだよ。相手にうっかり大怪我をさせてはいけないからね。気を付けないとダメだ」

『了解』
ティアがいじめに屈する事はない。だが、逆に相手を半殺しにしかねないので、それが一番不安だった。

こうして、少しの不安とたくさんの期待を胸に、ティアはマティに乗つて駆け出した。

フェルマー学園のある街は、各種の学び舎まなが集まり発展した街だ。騎士を育てるための騎士学校、魔術師の育成を目的とした魔術学校、普通の民が学ぶ民間学校などがある。『学園街』と呼ばれる一つの街だが、行政上は王都の中に含まれていた。王都は北にあり、馬車で一時間ほどかかる。国が街全体の警備をしてくれていて、かなり安全な場所と言えた。

街の外門が見えると、ティアはマティの背から降りる。

魔獣ディストレアは伝説級の存在だ。本来、人がいる場所に現れる事はない。誰もが子どもの頃に『出会つたら逃げろ』と教わる。そんなディストレアに、街中まちなかを歩かせるわけにはいかない。

ティアは神属性の魔術を使い、マティを子犬サイズにする。特徴的な赤い体毛は、いつもなら黒く変えているが、今回は白にした。これからマティは、ティアと一緒に寮に住むのだ。

学園の生徒は貴族の子どもが多いため、メイドや従者だけでなく、馬なども入寮を許可される。マティの体毛を白にしたのは、清潔感を持たせて印象を良くするためだ。

『荷物？』あ、そういうば置物になる練習してた』
ディストレアは人の言葉を解する。こうして会話する事も容易いのだ。

ちなみにフランとは、ティアと誓約せいやくしたドラゴンの子どもだ。親を密漁者達に殺されてしまったフランは甘えん坊で、ティアと離れるのは嫌だと学園にもついてくる事になつた。

フランの主そばはティアなので、その傍たにいられないのはストレスになる。そう教えてくれた家令リジットの助言により、フランの『置物大作戦』が発動したのだ。

ドラゴンは魔族が保護している。その子どもが人の国にいて、それも少女が飼つているというのは外聞が良くない。そんな事情もあり、置物になる特訓のために別行動していたのである。

「お兄様が荷物と一緒に受け取ってくれるはずだから、大丈夫だと思うけど……急いだ方がいいかな」

『お腹空いたら、グゥって鳴っちゃうもんね』

「そうだった！ 急ごつ」

フランのお腹から音がしたら、置物でないとバレてしまう。何より、空腹を我慢できない子どもなのだ。ティアは慌てて街中へと駆け出した。

フェルマー学園には、兄のベリアローズが通い出した時から何度も訪れている。ただし、正門から入った事は一度もない。

『今日は門から入るの？ あっちからの方が近いよ？』

「でもダメ。今日は堂々とね」

マティが示したのは、学生寮に近い外壁だ。いつもはそこを乗り越えて侵入している。急いでいるので心を惹かれないのでもないが、ここは我慢と鉄製の大きな門をくぐった。

「あれ？」

『どうしたの？』

「うん……気のせいかな」

一瞬、知っている魔力と気配を感じたように思つたのだ。

「……こんなところにいるわけないもんね」

そう結論付け、学生寮へと急ぐ。そこでは、ベリアローズと親友のエルヴァストが待つていた。

「遅いぞ」

「そう？ ……お兄様。なんでビミョーな顔してんの？」

「べ、別につ」

ティアの兄であるベリアローズ・ヒュースリーは、絵本に出てくる王子様のように見目の良い青年だ。十八歳を目前とした今、その容姿は女子生徒達を惹きつけて止まない。乳母達に何度も誘拐された事で、女性不信になつていていたのだが、ティアの特訓により肉体的にも精神的にも鍛えられ、なんとか克服していた。

どこか張り詰めたような雰囲気も、ここ数年でとても柔らかくなつてている。おかげで更に人気が出ているのだが、本人は自覚していなかつた。

「はは。ベルは日が昇る前から、ティアの事をそわそわと待っていたから」「つエル！」

エルと呼ばれた青年はエルヴァスト・フリーデル。このフリーデル王国の第二王子だ。母がメイド上がりの側妃であるため、幼い頃は周囲から心ない言葉を投げつけられていたが、それに負けずに明るく笑う少年だった。

ティアの指導によつて戦い方を覚えたエルヴァストは、自信もつき、より魅力的な青年になつてゐる。

「本当の事だろ？ その顔は寝不足だ」

エルヴァストの指摘に、ベリアローズは耳を赤くしながらそっぽを向いた。

「そんなに私に会いたかったの？ ギュッてするつ？」

「するかつ！」

相変わらず素直になれないベリアローズだ。

「あはは。それにしても、可愛いのを着てるな。良く似合つている」

「へへ、カル姐ねえにもらつたの。良いでしょ」

ティアはクルリと回つてローブを見せた。

「カル姐ねえさんは、相変わらず趣味が良いな。この前いただいた服、気に入つてるんだ」

「あれ、エル兄様に良く似合つてたもん。カル姐ねえったら、自分で買った服より人にもらつた服を優先させちゃうからさ。着てない服がたくさんあるから、またもらつてつて言つてたよ」

「優しいあの方らしいな」

ベリアローズとエルヴァストも既にギルドカードを持ち、共にCランクの冒険者となつてゐた。長期休暇の度にクエストを受けていたのだが、その際、よくカルツォーネが一緒に来てくれたのだ。おかげで二人とも、カルツォーネの事を『カル姐ねえさん』と呼んで慕つていた。

「さて、部屋に案内しよう……と思つたんだが、一応先生に挨拶しておいた方が良いんだ」

「先生？ 審せんの？」

「ああ。ここで待ち合わせて……あ、いらしたな」

「うん？」

エルヴァストの視線を追つた先には、柔らかい笑みを浮かべた男性がいた。男にしては細身で、金茶色の長い髪を一つに結んでいる。

「綺麗な男の人だね。あれが先せん……つ？」

言葉が途中で切れてしまつたのは、その人から感じられる魔力のせいだ。その歩き方にも、どこか既視感を覚える。

「やあ。君がヒュースリーの妹さんかな」

「はい……ティアラール・ヒュースリーと申します……」

「私はカグヤ。魔術学を担当している。それと、ここ第三学生寮の担当でもあるんだ。よろしくね」

「……カグヤ……先生？」

「さあ、中へ入つて。部屋を確認しておいで」

これで挨拶は済んだと、ベリアローズとエルヴァーストがティアを促す。一人とも早く部屋を見せたいようだ。

ティアはチラリと後ろを振り返り、兄達に聞こえないように小さく呟いた。

「サク姐さん……」

すると、そこに風が吹く。ティアの声を、風の精靈がカグヤへ届けたのだ。

カグヤが目を見開いたので、ティアはやはりと確信する。そしてイタズラが成功した時のような笑みを浮かべ、寮の中へと足を踏み入れた。

ティアに用意された部屋は、一人部屋だそうだ。

「多くの生徒は、従者やメイドを連れてきているからな。複数人用の部屋が人気で、一

人部屋が余っているんだ」

廊下を歩いていて目につくのは、それぞれの部屋を忙しなく掃除したり、荷物を整理したりするメイド達。ティアのように自分で部屋を確認しに来る新入生は、ほとんどいないようだ。

「ティアには、ちょうど良いだろう。それと、こここの寮長はエルだ」

「本当っ？ なら脱け出し放題じゃん！」

「いや、ダメだからな？ それに、ベルが副寮長なんだから、何かあれば私と連帯責任だぞ？」

エルヴァーストに釘を刺され、ベリアローズはティアに言う。

「……脱ぬけ出すなら、分からないようにやつてくれ」

「ラジヤ」

ティアを止める事はできないと充分理解しているので、ベリアローズは黙認する構えだ。エルヴァーストも、そうなるよなと苦笑するしかない。

「ほら、ここがティアの部屋だ。この真上が私とベルの部屋だから、何かあれば相談に

来るといい」

「うん。脱け出す時とかね」「いや、まあ……そうだな……」

「さあてと、フランム！」

そう言つて、ティアは元気にドアを開ける。すると待つてましたとばかりにフランムが

飛びついてきた。

《キュウウウウ》

「わっ、ダメダメ。お兄様達、ドア閉めて」

ティアに続いてベリアローズとエルヴァーストも部屋に入り、慌ててドアを閉めた。

「危なかつたな」

「見られてないよな？」

《キュウ、キュウ……》

「よしよし。ごめんね、遅くなつて」

《マティの寝るところ、どこ？》

フランムを撫でるティアの足下で、のんき呑気なマティが部屋を見回していた。それに答えた

のは、エルヴァーストだ。

「マティの寝床は、あれだ。フワフワだぞ」

《わあい》

「あ、こらマティ。あんまり騒いじや……そ、うだ、しゃおん遮音の結界を張っちゃえば良いね」

そう言つてティアは、あつさり結界を張つてしまつた。

「相変わらず、すごいな……」

「ティア。あまり大っぴらに魔術を使うなよ？ 僕らも最初は加減が分からなくて、大変だったんだからな？」

「あ……ドンマイ」

「違うだろ！」

ティアの魔術の腕は、国の魔術師長さえ軽く卒倒させる。そして、剣技や戦闘センスも最高峰と言えた。更にすごいのは、高い知識力。その全てを、ベリアローズとエルヴァーストは甘く見ていた。

それらが本当に洒落にならないレベルなのだと理解したのは、ベリアローズが学園の編入試験を受けた時だ。学力テスト・実技テスト共に歴代最高得点を獲得した。学園始まって以来の天才だと言われたほどだ。

一番驚いたのは、ベリアローズ自身だった。ティアにスバルタ教育^{ほどい}を施されたとはいえ、ここまで結果を出してしまえるとは思っていなかつたのだ。実力を大きく伸ばしたのはエルヴァストも同じで、新学期の実力テストで驚く事になった。

「まあ、おかげでベルが私の友人として周囲に認められたがな」

「ああ、おかげでクラスメイトとの距離感もちょうど良いんだがな……」

「ちやほやされる事も、仲間外れにされる事もなかつたのは幸いだと言える。しかし、

教師達は大いに戸惑つたという。もはや自分達に教えられる事などあるのかと。

「いいか？ 周りのレベルを見極めるなんて、ティアには簡単だろ？ とにかく大人しく、目立たず、十歳らしく頼むぞ？」

「だな。ベルの時も大変だつたからな。これ以上、教師陣を追い詰めないでやつてくれ」「もう……分かつてるもん。ちゃんと『噂のヒュースリー伯爵令嬢^{うわざ}』を演じてみせるよ？ イメージをしつかり使い分けておいた方が、外で活動しやすいしね」

「待て。何する気だ？」

全く分かつていらない様子のティアに、ベリアローズは焦る。これまでのティアを知つていれば、大人しい伯爵令嬢も演じられると分かるのだが、その言葉を聞いて不安になつた。

伯爵令嬢ティアラール・ヒュースリーは、七歳の頃から聖女と呼ばれている。そのイメージを壊さぬよう、ティアは冒險者の時とイメージに差をつけている。それはいざといふ時、伯爵令嬢という肩書きを有効に使うためだつた。

「何つて、休みの日には冒險者ティアとして、クエスト受けるに決まつてるじゃん。そういうじゃないと体がなまつちやうし、何より私が耐えられない！」

「……そういえば、毎日何かしらやつていたものな……分かつた。ストレスは溜めるな」「そうだな。ティアがストレスを溜めたりしたらどうなるか……。だが、この学園街には貴重なものが多いんだ。活動する時には充分、気を付けてくれ」

「はあい。とりあえず、これからひと月くらいは街の外で活動するつもり。近くの盗賊さん達と遊ぶ予定だから、大丈夫だよ」

「……ほどほどにな……」

今から先が思いやられる兄達だつた。

昼前。ベリアローズとエルヴァストは、入学式の準備があると言つて部屋を出でいつた。ちなみに入学式には、父ファイスタークと母シアンも来る事になつてゐる。ティアは少ない荷物の整理を終え、フランとマティに食事をさせると、静かに部屋で

待機する。そして、その人がやつてきた。

「どうぞ」

ノックの音に、ティアは返事をする。ゆっくりと開いたドアからスルリと入り込んできたのは、先ほどぶりのカグヤだった。

「こんにちは。カグヤ先生……ううん、サク姉さん」

今は男性の姿をしているが、ティアが知るサクヤは、お茶目で魅惑的なお姉さんだつた。声音や仕草が自然すぎて、つい騙されてしまうが、本来の性別は男。もちろんティアや周りの友人達は、男だろうと女だろうと気にしない。だが、サクヤに誘惑される男性を見て気の毒に思つたのは、一度や二度ではなかつた。

サクヤは獣人族なのだ。キツネの耳と、モコモコフサフサした九本の尻尾がある。姿を変える変化の魔術^{へんげ}が得意で、人の国にいる時は耳と尻尾を隠していた。

獣人族の中でも、九尾^{きゅうび}と呼ばれる彼らの血筋は長生きだそうだ。かつて、ティアの周りにいた誰よりも年上だったサクヤ。まだ健在だらうとは思つていたが、こんなところで再会するとは思わなかつた。

「つ……サティアちゃん……なのよね？ 髪や瞳は赤くないし、顔も少し違うけど……」

「うん。久しぶり。サク姉さん、元気だつた？」

「…………ええ……つ」

サクヤはしゃがみ込み、そのまま泣き崩れた。

どう見ても男の人だけれど、その魔力や気配から間違いないと思つたのだ。恐らく、サクヤもそれらをティアから感じて、サティアだと確信したのだろう。

「サク姉さん……怒つてな——」

「怒つてるわよつ！ 何よつ……突然いなくなつて、ひよつこり戻つてくるなん

てつ……そういう勝手なところ、マティにそつくり……」

乱暴に涙を拭つて睨みつけるサクヤに、ティアは苦笑する。サクヤがマティと呼ぶのは、マティアス・ディストレア——サティアの母だ。

サクヤとカルツオーネ、シェリリストマティアスは冒險者としてパーティを組んでいた。マティアスの結婚を機に解散したが、絆は消えなかつた。

「ごめんなさい。でも、サク姉さんも同じだと思うよ？ すぐフラフラつといなくなつちやうじやん」

「う……確かに。……はつ、そんな事を言うなんて、さてはあの陰険エルフに禁術とかで甦^{よみがえ}られたのねつ？」

「いや……ありそつだけど、違うよ？」

ティアも強く否定はできない。世界樹がティアの転生を預言しなければ、シリスは

間違いなく研究していただろう。

「でも、本当にサティアちゃん？ 見た目は別人なのに記憶があるって事よね？ ……はつ、^{いんげん}エルフが記憶をつ！」

「いや、だから違うって。転生したの。なんか、^{うさんくさ}胡散臭い天使に会つてね……その……昔の私つて妙な呼び名があるでしょ？」

「あ、『断罪の女神』……え、女神になつたの？」

「……」

女神と聞いてイラつとするのは、もう癖くせみたいなものだ。

「そつか……女神様ねえ……よかつた……」

「うん？ 女神なんてやんないよ？ 私は私らしく生きるつて決めたんだから」

「そう……でも、また会えてよかつたわ。女神様じやなくたつて、サティアちゃんはサティアちゃんだもの。今度こそ幸せになつて。あんな^{いんげん}エルフになんか捕まつちやダメよ？」 女の子は、いつだつて運命の人を探す生き物なんだから」

そう言つたサクヤには、昔のようなお茶目な笑顔が戻つていた。

「それで？ サク姐ねえさんは、運命の人とやらに出会えたの？ 男の姿になつてるけ

ど……それって、本来の姿？」

ティアは改めてサクヤの姿を見る。細く柔らかそうな明るい茶色の髪。金に近い薄茶色の瞳が覗く、切れ長の目。優しい笑みを浮かべる口元。小さな顔と長い手足。ほどよく筋肉がついて均整の取れた体つき。その姿に違和感はない。

「うん。そなうなんだ……格好悪いでしょ？」

「え、そなう？ むしろ女子生徒にモテるんじやない？」

「あれ？ そういえば……」

思い出すように、目を上方へ向けるサクヤ。

「サク姐ねえさん……もしかして無意識だつたの？」

「つ仕方ないじやなあい。里の中ではひよろいダメ男だつたんだもんつ。里を出てからは、ずっと女で通してたし」

「……言葉遣いは、意識しないと戻っちゃうんだね……」

そう指摘すれば、サクヤは気まずそうに目をそらす。

「うつ……だ、大丈夫よ？ 先生やつてる時に、この言葉遣いになつた事はないもの」「本当かなあ……」

いて待つてなさい！」

「ふふふ、任せなさい」

「期待してます」

おかしな方向へともつれ込みながらも、サクヤとの再会は無事叶い、今夜また話そう
という事になった。

いよいよ入学式が始まった。暖かな陽射しが降り注ぐ中、屋外に用意された壇の上には、今期の小学部の担当教師達と、今期から加わった新任教師達が並んでいる。

新入生達は壇の方を向いて並び、その後ろに父兄^{ふけい}がいた。父兄^{ふけい}の左右には中学部と高学部の生徒達が並んでおり、それを聞くように中学部、高学部の教師達が立っている。フェルマー学園は小・中・高それぞれが三つの学年に分かれていて、合計五百名ほどの生徒を抱えている。更に教師達と、警備、事務、管理を担当する大人達が百人近く働いていた。

学園の広さも相当なものだ。巨大な学園街の五分の一がフェルマー学園の敷地であり、その広さは一般的な街の半分ほどもある。

二階建ての校舎は横に長く、L字に折れ曲がっている。敷地内には五つの寮の他、図

書館や大きな闘技場、全生徒を入れる広さのダンスホール、授業で使う備品の管理棟など、多くの施設が点在していた。

そして今、壇上^{だんじょう}の中央では、ティアのよく知る人物が祝辞^{しゆじ}と挨拶^{あいさつ}を述べている。

「今期より高学部の魔術学を担当する事になりました、ウルスヴァン・カナートと申します。新入生の皆さんとは直接的な関わりは少ないでしょうが、新たにこの学園に加わった者同士、共に歩んでいきましょう」

優しく微笑むウルスヴァンに、新入生達も笑みを浮かべる。彼の表情は清々しく、やる気に満ちていた。高学部の生徒達は、元魔術師長として有名なウルスヴァンから教えを受けられると知り、色めき立つているようだ。

新任教師の列に戻ったウルスヴァンは、穏やかな表情のままだった。しかし、進行役の教師が口にした言葉で、若干頬を強張らせる。

「次に、新入生代表、ティアラール・ヒュースリー」

「はい」

かつた。ティアがその力を遺憾なく發揮した現場に居合わせたウルスヴァンは、ティアを少しばかり恐れているようなのだ。その怯えた顔を見て、あまり追い詰めないでおこうとティアは思った。

「聞きました？ 彼女、満点だつたそうです」

「ええ。学園での目標を書いた作文など、まるで論文のようだつたと評判です」

「あのヒュースリーの妹ですかね。頼もしい限りです」

そんな教師陣の囁き声を、風の精霊達がティアの耳に届ける。ティアが褒められていると思つたからだろう。

（うんうん。分かったよ～）

壇上に上つたティアに、みんなの視線が集中している。それが嬉しいらしく、精靈達はご機嫌だ。

ティアは、直前まで挨拶文を考えていた。ベリアローズから『十歳の子どもらしく』と釘を刺されたので、どうしてやろうかと考えていたのだ。

だが、先ほどのウルスヴァンの様子と教師達の期待する声で方針が決まつた。この際だと思い、『聖女』と言われたとつておきの笑顔で挨拶を始める。

「この佳き日に、伝統あるフェルマー学園へ入学できた事を誇りに思います。お父様、

お母様、そして多くの方々に見守られ、今日という日を迎えた事に感謝すると共に、節度ある生活を心がけ、この学園の名に恥じぬ生徒となる事を誓います。私達は、この学園で多くの事を学び、国の健となるべく、高い志を持つて己を磨いていく所存です。先生方、諸先輩方。ご指導のほど、よろしくお願ひいたします。新入生代表、ティアラル・ヒュースリー』

十歳の子どもとは思えない言葉の数々に、会場は静まり返る。その表情や口調から、誰かに用意されたものではなく、ティア自身の言葉だと察せられたからだ。

そんな驚きに満ちた空気を変えるべく、会場に暖かな風が吹き抜ける。どこからやってきたのか、色とりどりの花びらが落ちてきた。それらがティアの周りで舞い踊り、美しい礼をしたティアの姿を際立たせる。これも全て、精霊達の仕業だった。

（まあ、クソ天使の仕業じゃなければいいか。……あ、蝶々）

精霊達ならば許すと、ティアは笑みを深める。聖女と呼ばれる原因となつた、七歳の『祝福の儀』。その時の出来事を思い出し、内心苦笑していた。最初に拍手をしたのは、見かねたベリアローズとエルヴァストだった。それに、今にもクスクスと笑い出しそうになつてゐるサクヤが続き、やがて会場が大きな拍手で満たされる。

(これで、印象はバツチリ決まつたかな)
『噂のヒュースリー伯爵令嬢』が始動した瞬間だった。

式が無事に終わり、新入生はそれぞれの教室へと案内される。父兄達は、他の部屋で今後の説明を受ける事になつていていた。

ティアが教室へ向かう列に並んでいると、教師の一人が声をかけてきた。

「ヒュースリーさん」

「はい」

もちろん、今も『伯爵令嬢バージョン』だ。優雅に、しなやかに動くのがコツである。ティアは他の生徒達から離れ、教師のもとへと向かう。

「教室での説明会が終わつたら、各学年の代表生徒が集まる会議がありますので、第三会議室に来てもらいたいのですが……」

「承知いたしました。本館の……二階で合つていますか？」

「そうです。お願ひしますね」

ティアは学園の見取り図を思い出していた。まさか、侵入経路を確認するためにそれを入手しているとは、誰も気付かないだろう。その教師も、きっとベリアローズから聞

いていたのだろうと思い、特に不審には感じなかつたようだ。

離れていく教師と入れ替わりに近づいてきたのは、ウルスヴァンだった。周りにいた生徒達はそれぞれの教室へ向かい、すっかり人気がなくなつてゐる。

「ごきげんよう。ウルスヴァン様。魔術師長、辞められたとか？」

ウルスヴァンは何やら三年前（トヘカラ）から、『平穏な隠居生活』を夢見るようになつたらしい。原因はティアだ。ティアに喧嘩（ケンカ）を売つたおバカな騎士達や国との間で板挟みになり、それが耐えきれないほどのストレスだつたようだ。

「……はい。お久しぶりですね……ようやく後任が決まり、辞められたと思つたのですが……」

「言いたい事はハッキリと」

「つ、なぜあなたがいるんですつ？」

少々声が裏返つていた。態度を取り繕う余裕もないほど怯えているようだ。こうなるとティアはからかいたくなつてしまふ。

「本当にハッキリ言いましたね……十歳になつたんですから、当然でしょう。そんな事言つて、実は私に会いたかったとか？」

間髪を容れず否定するウルスヴァン。ティアは悲しげに目を伏せながら胸を押さえる。そんな二人の会話が他人に聞かれないよう、風の精靈王である風王が音を遮断していた。「そんな……傷付きました……この心を癒やすためには、ここから魔術で王城を吹っ飛ば……」

「ツやめてください!!」

ティアの実力と、過去の行いを知っているウルスヴァンには、冗談に聞こえないらしい。こんなところもストレスの原因の一つだったので、ウルスヴァンは泣きそうだ。そこへ、ベリアローズとエルヴァストがやってきた。

「ティア。ウルをからかうのはやめてやつてくれ。若く見えても歳だからな」

二人はティアとウルスヴァンの組み合わせを見ただけで、状況を正しく理解したようだ。

「エル、歳の問題じゃないだろう。ティア、教室に行かなくていいのか?」

「もう行く。じゃあね、ウルさんっ」

ティアは無邪気な笑顔を三人だけに見せ、教室へと向かった。

「私の平穏な生活が……」

「ウル。あれだ。意識を変えろという神の啓示だ。第二の人生、ティアと楽しむ事を覚えた方がいい」

「色々と捨てれば楽になりますよ……」
「うう……」

エルヴァストとベリアローズは領き合ふと、肩を落とすウルスヴァンの両側に立つ。

そして、彼の背中を支えるように手を回し、そのまま職員室へと向かうのだった。

教室へ向かつたティアは、その手前で立ち尽くす一人の女子生徒を見つけた。賑やかに談笑する生徒達の中に入れずにいるらしい。

「どうなさったの? もうすぐ先生がいらっしゃるわよ?」

ティアは例のごとく、言葉遣いに気を付けて尋ねる。すると、その女子生徒が驚いて振り向いた。

前髪を鼻の辺りまで伸ばしているため、暗い印象を受ける。だが、それよりもティアは、この女子生徒から不思議な魔力の波動を感じていた。
(もしかして……混じってる?)

人にはない強い波動。異種族と交流があるティアだからこそ気付いた違和感だった。だが、それをそのまま口にするのは憚られるので、その事には触れない。

「一緒に入りませんか？」

そう笑みを浮かべて言えば、目の前の女子生徒は唇を引き結んだ。そして、意を決したように口を開く。

「うるさい。お前もバカにするんだろう、ぎぜんしゃ偽善者め。そんな顔しても騙されないからな！」

「へ？」

その時、遠くから教師がやつてくる気配を感じた。それに女子生徒も気付いたのだろう。再び唇を固く引き結び、何も言わずに教室へと入っていく。すると、こんな会話が聞こえてきた。

「なあ、あいつだろ？ 混ざり者つて」

「そうそう。なんか目の横の辺りに、気持ち悪いウロコがあるんだって」

「やだよ。化け物じやん」

「そんなのが同じクラスなの？ お父様に言つたら変えてもらえるかな？」

「私も言おう。やだよ、そんなのが近くにいるなんて」

それを聞いたティアは、思わずドアを乱暴に開けた。

「わっ」

「あ、ヒュースリーさんっ」「うそ、同じクラス!?」

色めき立つクラスメイトとは目を合わせず、ツカツカと一番後ろの席へ向かう。そこで俯いて縮こまっているのは、先ほどの女子生徒だった。

ティアが目の前に立つても顔を上げない彼女に、クラスメイト達は眉をひそめる。ティアはそれに構わず、いきなり彼女の髪をかき上げた。

「なっ、何するんだっ!!」

飛び上がるよう立ち上がった彼女は、ティアの手を撥ねのけようとして、当たらなかつた事に驚く。

一瞬見えてしまったウロコのようなのに、息を呑むクラスメイト達。そんな彼らにティアは目を向けた。

彼らは貴族の子どもなので、異種族に否定的なところがある。人以外の種族に免疫がない事もあり、そこかしこで『いやだ』『気持ち悪い』などと口にしていた。中には悲鳴を上げそうになっている者もいる。

『意見がある人はお立ちなさい。後でこそそと陰口を叩くのではなく、今ここでおつしやい。そのあなた方。先ほど、お父上に何を言うとおつしやいましたか？』

「え？ あ……だ、だつて……」

結局、大きな声では言えないのだ。目をそらすクラスメイト達を見て、ティアは密かに嘆息する。そして、陰口の対象となっていた女子生徒の方を振り返った。

「突然ごめんなさいね。わたくしの名はティアラール・ヒュースリー。あなたのお名前は？ なんとおっしゃるの？」

「へ？ あ……アデル。アデル・マランド……」

「マランド……そう。この学園を創設したフェルマー・マランドの血筋ね。それで確信できただわ。自信を持ちなさい、アデル。あなたには、誇り高き竜人族の血が流れているのですよ。卑屈になどなってはいけません。ここにいる誰よりも様々な可能性を秘めているのですから。その肌も、髪で隠す必要などありません。それは、強さの証です」

「証……」

前髪から覗く瞳に、強い輝きが宿るのが分かった。それに満足したティアは、笑みを深めて言う。

「強くおなりなさい。力だけでなく、心も強くなければ、竜人族の血が泣きますよ」

その時、ちょうど教師が入ってきた。

「お、なんだ？ どうかしたのかな、ヒュースリー？」

そんな教師の言葉に、ティアはニコリと微笑む。

「大した事ではありません」

ティアが席につくと、教室内は不思議な緊張感で満たされた。それは説明会が終わるまで消える事がなかつた。

説明会が終わり、生徒達は父兄^{ふけい}と合流すべく教室を飛び出していく。

小学部の一年生は集団生活を学ぶために、一年間の寮生活が義務付けられている。週末の休息日と長期休暇の時だけは帰省^{きせい}が許されるが、子ども達にとつては明日の朝までが両親と過ごす最後のひと時と言えるのだ。

ティアは教師に指示された第三会議室へ行かなくてはならない。特に時間の指定はなかったので、校舎から人気が引いてから動こうと、のんびり荷物をまとめていた。

「あの……」

遠慮がちに声をかけられ、ティアは後ろを振り向く。

「あら、アデル。ご両親がお待ちではないの？」

「う、うん。そうだけど、一応、お札をと思つて」

「お札？」

髪の隙間から覗く瞳は、まっすぐにティアを捉えている。教室には、既にアデルとティアしかいなかつた。先ほどまでの緊張感に耐えられなかつたのか、他の教室よりも生徒の引きが早かつたようだ。

「うん。言つてくれたから。これが『証』だつて。あたしがまだちつさい時に、ひいばあちゃんが言つたんだ。『これは、戦士の証だ』って」

アデルは小さな時から、こめかみのところにあるウロコのようないふ皮膚が嫌で仕方がなかつた。光を反射するそれは、人とは違うのだという『証』。だから、前髪を伸ばして隠していた。光に当たらないように、なるべく下に向いていたのだ。

「これを見て近づいてくる奴らは、『異種族の迫害に反対』とか言いながら、可哀想な人を見るような目を向けてきた。あいつらは偽善者だ。けど、あなたは違う。なんで？」臆さすにまつすぐ見つめてくるティア。そんな人物にアデルは初めて出会つた。教師達でさえ、見ないよう目をそらしていたのだ。

アデルには不思議だつた。ティアに見られても、全然気にならなかつたのだ。こめかみに意識を向けられても、気まずく感じる事はない。

「なんでと言われても……多分、あなたが出会つてきた人達は、異種族と本当の意味で付き合つた事がないんじゃないかしら？」人と違う特徴つて、どうしても目が行つてしまつた。

「まうわ。けど、それがあつて当たり前のものなら、そつはならないでしよう？」

「……目の色が違うとか？」

「そうね。エルフは耳が長く尖つてゐるし、魔族は髪や目が独特の色をしている。獣人族は、耳や尻尾がある。でも、それがその種族にとつて……その人にとつて当たり前のものなら、そんなに気にならないわよね」

そう言ひながらもティアは、苛立ちを感じていた。わざわざ『異種族の迫害に反対』と言いながら、アデルに近づく者がいるという事に。しかし、それを表情には出さず、わずかに苦笑する。

「けど……そうね……あなたの場合は、あなた自身が気にしすぎてゐるのではないかしら。その髪も、見られたくないと思つてゐるから伸ばしてんじやないの？ あなた自身が『見られていないか』常に意識しているから、必要以上に気になるんだと思うわ」「それは……そうかも……」

気になる場所を意識してしまるのは、見られる方も同じだとティアは思う。

「ふふふ。私の友人の中にはエルフも魔族も獣人族も、竜人族もいるのよ」

「え？ と、友達にいるのつ？」

「ええ。……ああ、そろそろ行かなくては。また明日お会いしましょう」

「うん……さようなら……」

戸惑うアデルの様子が可愛らしい。そう思いつつ、ティアは教室を後とした。

「やつぱり、いなかつた」

フェルマー学園の創立は、約六百年前。バトラール王国に創られた当時は、まだ小さな学園だった。

様々な種族や身分の子どもが通い、将来は冒険者として世界中を渡り歩く事を視野に入れた学園。教師達も人族だけでなく、エルフ、魔族、ドワーフ、獣人族、竜人族と、それぞれの分野に特化した種族の者達で構成されていた。

それなのに今は、貴族の子どもが多くを占め、教師もサクヤ以外は全て人族だつた。「あの様子じやあ、サク姐ねえさんが獣人族だつて事も知られてないんだろうな……」会議室のある本館。その一階に、創立者フェルマー・マランドの肖像画があつた。その前に立つと、ティアは懐かしさを覚える。

(フェルマー先生……)

肖像画の中のフェルマーは、あの頃のままの姿をしていた。銀糸のきんしような髪をまとめ

上げ、夫である竜人族のマートウファル・マランドとお揃そろいのイヤリングをしている。ブルーダイヤのイヤリングは、青く深い色合いの瞳にとても良く似合っていた。

フェルマーは、バトラール王家専属の教師の一人だつた。週に三日、歴史学の担当だ。しばらく肖像画を見つめていたティアは、感傷を振り払うようにゆっくりと目を離す。そして会議室に着くまでに心を落ち着けようと、その場に留まりそうになる足を踏み出すのだった。

長机を四角く並べて配置した、会議用の大きな部屋。そこにはベリアローズとエルヴァスト、そしてウルスヴァンもいた。

「ティア、席はここだ。意外と早かつたな。友人はできたか?」

エルヴァストが楽しそうに話しかけてきた。

「残念。お友達になり損そぞねた子ならいたけどねえ」

小声で話すティアに、ベリアローズは眉を寄せた。

「ティア……もしかして、ずっとあの路線でいくつもりか?」

入学式の時のティアは、ベリアローズがクラスメイト達から散々聞かされた『聖女のよ^{さんざん}うな少女』『深窓の伯爵令嬢』というイメージ通りだった。

立ち読みサンプルはここまで

51 女神なんてお断りですっ。5

50

この学園に来てから、何度否定したか知らない。だが、その美少女然とした容姿とも相まって、本来のティアのイメージとはかけ離れた伯爵令嬢像が、完璧に出来上がっているのだ。

「なあに？ お兄様。こんな私はお嫌い？」

「いや、というより、大変不安だ」

「は？」

妙に力を入れて切り返された事に、ティアは微笑みながらも目を細める。すると、ベリアローズは慌てて続けた。

「し、仕方ないだろうつ。自分の胸に手を当てて、よく思い出してみろつ。出会って間もない僕に、お前は一体何をしたつ？」

「うーん……体力作りのためのトレーニングメニューをプレゼントしなかった？」

間違いない。根性無しの繼嗣では困ると、スペシャルメニューを考えたはずだ。だが、どうやらベリアローズの認識は違うらしい。

「僕は覚えているぞつ。突然部屋のドアを蹴破つたティアに『弱つちいお兄様。鍛えてやるから表へ出ろつ』なんて言われて無理やり連行された後、マティの餌扱いされて噛みつかれたつ」

涙目になつて当時を思い出すベリアローズ。

ティアは、それがどうしたのかと首を傾げる。

「え？ 何？ もしかして、私がクラスメイトを鍛え^{きた}るとでも思つたの？ 確かに軟弱なバカ貴族が多そうだし、ここにいたら簡単に親に泣きつく事もできないもんね。この一年の間に色々と教育を……」

「するなよつ？」

「やめてくださいつ！」

静かに会話を聞いていたウルスヴァンも慌てて止める。

「いや、意外にありか？」

「エルツ」

「殿下つ！」

まさかのエルヴァストの同意に、ベリアローズ達は悲鳴を上げそうな勢いだ。そんな彼らを安心させるつもりでティアは言つた。

「まあまあ、落ち着いて。今までみたいな力業はやらな^{ちからわざ}いって。だって軟弱すぎて面白くないもん。うつかりズチつと潰^{つぶ}しちゃいそうだし、自制するためにも、しばらくはこのイメージでいくよ」